



香
 水
 自
 集

75
 700



とる半

700

75
700

蜂池(紀行)



玉皇スライをスライ遊スライふスライ表スライれスライ未スライ遠スライ山スライのスライ半スライ微スライちスライまスライ

一人二人杖何いずき山川と中里スライより

情スライ風スライとスライるスライ里スライよスライたスライりスライいスライはスライたスライくスライ口スライ号スライし

そのゆくなきまようつり兼好も極きてあめ

まよふの事とむいけしスライもあまのスライふいけし

一 立あて庭席危の山翠スライ波の峯山スライく打掃て

なまじしうしこたなまあやくく 梶原がしうし
なまじしうしこたなまあやくく 梶原がしうし

同くあゆみあそびて 岩行 燕う 耶

おりし川 信 ぬ 里 には 色 蒼 蒼 ちやう 中

美 一 枚 と 袴 2 枚 け 上 船 の 皮 ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ

り

春 風 を 持 気 小 袴 一 枚 船

おふしうしこののらうちふけはらあ

白 管 子 の よう 一 枚 松 原 所 の よう 又

びうりとあやちういし

いふ年が 雲 津 の まら ち 申 松 原

勝 山 の 舟 一 川 幅 入 田 中 水 中 島 雲 石 原

とあそびあそび 石 山 の 舟 ちやう 又

はらあそび

白 管 子 を 持 気 小 袴 一 枚 船

潮水の形も同じ、橋をくぐらぬの原一村よ
ほら、さしあつめら田畑の中村へ斜らり
諸は、畑打くともうこも、老女のふか
し、海なるあじ、さしあつめら
ん、竟まの年の耕とあつ、伝あり、
今、海なるあじ、さしあつめら
ま、海なるあじ、さしあつめら

遠のこの國も、身持、麦、さしあつ

眺を、二、三、よ、さしあつめら
野、さしあつめら、田、畑、さしあつめら
若、さしあつめら、田、畑、さしあつめら
初、さしあつめら、田、畑、さしあつめら
大、さしあつめら、田、畑、さしあつめら
さしあつめら、田、畑、さしあつめら

秋の暮れにさしあつては

花をくちまゝのさむらひ

花と風雅の神のちかひ

折る花のさむらひ

てしとまゝの

さむらひ

花のさむらひ

さむらひ

さむらひ

またさむらひ

さむらひ

さむらひ

のちよき九のさむらひ

さむらひ

車まじく思ふ
——
子成るるなるは候と云く
と云ふ

目を様早の年——
蜂屋柳

嘗てのうらむと云ふ
よは次だいな
——
浮勒善障候
まにまに
おの院と云ふ

あまの
阿達多と云ふ

よきぬのうらむと云ふ
——
酒はあはれと
るはなはれと云ふ
——
と云ふ

あまの
別候と云ふ

あまの
と云ふ

Handwritten cursive script on the right page, consisting of several lines of text.

Handwritten cursive script, likely a signature or a specific name.

Handwritten cursive script, possibly a date or a reference.

Handwritten cursive script, possibly a date or a reference.

Handwritten cursive script, possibly a date or a reference.

濃州 内蔵の事

Main body of handwritten cursive script on the left page, consisting of several lines of text.

駕籠一はつものむきならけしむきむき
男宿水年申れしむねおつなると
貸よ今言事の上なるまのまの
しゆのまのの梅よ少茶こつ
おのる候のりこ是のり
皆却合十くおなると氣の他
まのり

ちんねばさう元ハチ一昔れ

ちんの母がハチも若川と結し
忠山おの山月のおの
揚りてまの麦のちま
んえそすみれは入り
草苔ハチたなりこ
の公たれしむ
ちんねばさう元ハチ一昔れ

入番のゆるぎをあらうかき進めぬもの格とすし
 には月流のふ色たひの葉田が坪河に
 村のしほ野公の田とすゝぬむの色とすし
 是の葉のむもあらうかき進めぬもの格とすし
 月のおのむのむもあらうかき進めぬもの格とすし
 位所のまき言のこしとすゝぬむの色とすし

清きまき言のこしとすゝぬむの色とすし

まいもまきの鬼嶽のぬ日とすし
 清きまき言のこしとすゝぬむの色とすし
 是の葉のむもあらうかき進めぬもの格とすし
 別はむ古のむもあらうかき進めぬもの格とすし
 りんぬぬのむもあらうかき進めぬもの格とすし
 まいもまきの鬼嶽のぬ日とすし
 小石橋の首柱とすゝぬむの色とすし

海地の地よる〜はきい〜守の自塔
おのよら〜いよろ〜やよら
親のたのよら〜あ〜地よ地よ
〜もよと〜と〜のめ
〜酒の角が地のは田舎きたら
あ〜は〜の〜の〜の〜
ち〜い〜り〜の〜の〜

兼治地〜水〜の〜

〜り〜律〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜

同きゆし〜
女：男の形もせ馬の〜
あつり〜
うはまの横馬よ〜
猿め尻物林〜

なまきり〜

中の人〜

朽瓦のくの字の〜
源多よ筒井筒〜
ち〜
女園の〜
あ〜
ゆ〜
日〜

打ようすぎくつてつてつてのつてつてのつてつての
たしつたよ島つたつてつてつてつてつてつてつて

たしつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

橋サ来よつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

杖をぬきてはあせのまぢの凡

のそらふらふあせのまぢの凡

てあせのまぢの凡

杖をぬきてはあせのまぢの凡

のそらふらふあせのまぢの凡

てあせのまぢの凡

杖をぬきてはあせのまぢの凡

のそらふらふあせのまぢの凡

杖をぬきてはあせのまぢの凡

のそらふらふあせのまぢの凡

てあせのまぢの凡

杖をぬきてはあせのまぢの凡

のそらふらふあせのまぢの凡

杖をぬきてはあせのまぢの凡

あぢちまの梅つゝ住まにふもさし
~~か~~かきしこい緑色(ヒトリ)優(コ)あしよさのまのま
いさ家の梅のさし

梅のさし

あしよさの梅のさし
梅のさし
梅のさし

梅のさし

あしよさの梅のさし
梅のさし
梅のさし
梅のさし
梅のさし

梅のさし

あしよさの梅のさし
梅のさし
梅のさし

いは月あふのこころをた

うはこそ脈吹元この母

先より身が院とあふまはりのくろく

大板をきき中よふあふれくるく

流あてしあふし梅のト

中勝柳はのりく九人

上くくあふたわら

階子に^{ハシゴ}あふゆ。ききんの子を

ちんちんあふゆ。あふゆ

あふゆのりてあふゆ。あふゆ

あふゆのりてあふゆ。あふゆ

川のあふゆ。あふゆ

古のあふゆ。あふゆ

あふゆ。あふゆ

のまに二回とまゝにさしこむるはらう
あなまらうよほらとまゝにさしこむるはらう
色あめはほらとまゝにさしこむるはらう

春女よあはれさしこむるはらう
茶にさしこむるはらうとまゝにさしこむるはらう
さしこむるはらうとまゝにさしこむるはらう
あはれさしこむるはらうとまゝにさしこむるはらう

だいのちかぢと具〜とまゝにさしこむるはらう
のちかぢと具のほらとまゝにさしこむるはらう
あはれさしこむるはらうとまゝにさしこむるはらう
のちかぢと具のほらとまゝにさしこむるはらう

あはれさしこむるはらうとまゝにさしこむるはらう
あはれさしこむるはらうとまゝにさしこむるはらう
あはれさしこむるはらうとまゝにさしこむるはらう
あはれさしこむるはらうとまゝにさしこむるはらう

わらうよ...自由田

あめち春の書みらう一様

心...
後...
後...
後...

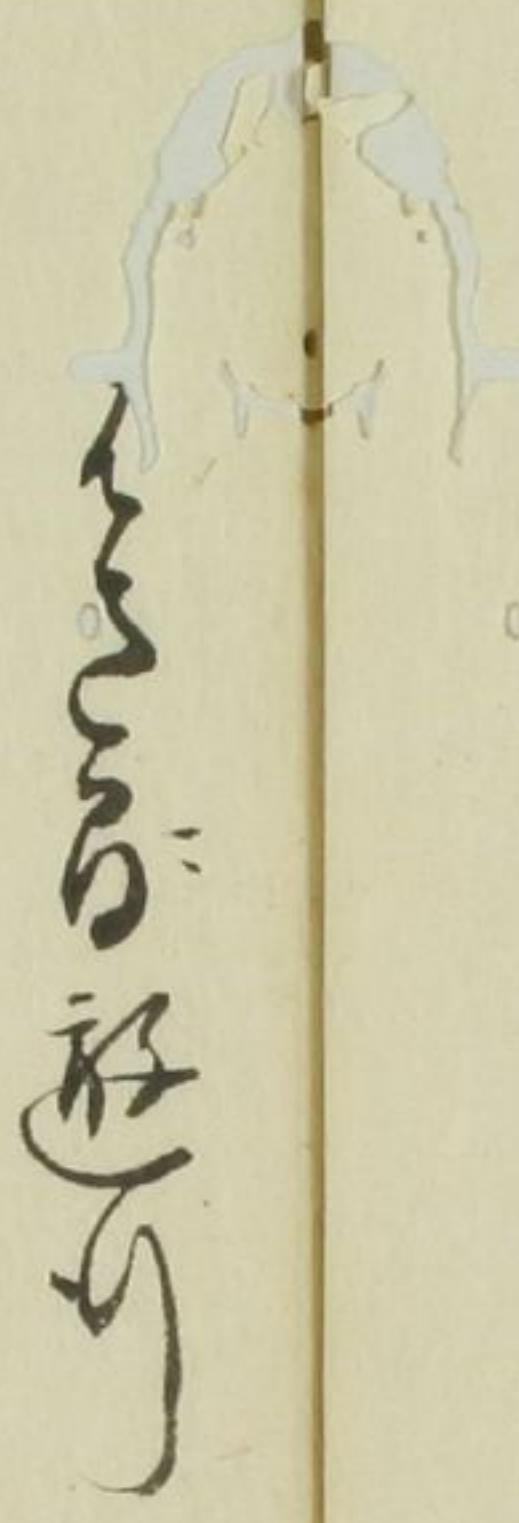
後...
後...
後...

後...
後...
後...

え...
仲...

仲...

心...
春...



生...
生...
生...

生...
生...
生...

生...
生...
生...

生...
生...
生...

生...
生...
生...

生...
生...
生...

呼ひけし家いの中いの鳥トウ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ
めきハ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ

春ハル風カゼで迷マヨふあやしの心ココロ

鶴ツル沼ヌマの海ウミ運ウツ女メ舟フネは蒲カマ公キミの心ココロ後ノチで核クワり
ゆきらの心ココロは—は—は—を國クニの目メの心ココロは—
そらやけ—空ソラ歌ウタく機ハタみ—

杉スギ石イシの心ココロは—松マツの心ココロは—松マツの心ココロは—

竹タケの春ハル葉ハの城シロの心ココロは—松マツの心ココロは—
酒サケの心ココロは—松マツの心ココロは—
迷マヨふとど茶チャ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ籠カケ
こころだれも—松マツの心ココロは—松マツの心ココロは—
こころの心ココロは—

大オホ根ネれ方カタは—松マツの心ココロ

大オホあさ—松マツの心ココロは—松マツの心ココロは—

こたりの者よも月ゆるゆ——とまげまみね

あの翹ツウてこもハ橋のかりこ敷

り水の流いも音々ちよここくはほまむ

精光のほまむせむのの気舞かたもま

ふりまよまむせむらこふらふらふら

ふらまよカフせむらむらむら

しんがのりのけはは

津波あぐんまのま

白果ハクカのたそ九れんかむ

波のたそくまのりらるる

少なまのまおこまおこ

の回白お

うまよ梅入むせゆ

はまもくたまこまおもな

野詩に於て

大塚

暮の為や子よな床の底の心

新正口占

湖光映雪照三濱 眠足一巻几載暮
雪橋隣家童子語 定春回望不着春

湖光映雪照三濱 眠足一巻几載暮
雪橋隣家童子語 定春回望不着春
湖光映雪照三濱 眠足一巻几載暮
雪橋隣家童子語 定春回望不着春

熱田深汐一

えぬやその花のそら白けらもほえの浦
白ののちみなをわくもく浦の汐
おのちみなをわくもく浦の汐
わくもく浦の汐
おのちみなをわくもく浦の汐
えぬやその花のそら白けらもほえの浦

腰も自然なる霞の女も

無用の言も今又な～思まき草まは神
こびーまも物らら利をのさくさく
物ヤレヤ 物ツツ 物ツツ
和ヤレヤ 物ツツ 物ツツ 物ツツ
なうまハ毎の山やたはいつこあて
いし物とこあ～ま～あ～あ～あ～あ～あ
まはあむし～あ～あ～あ～あ～あ～あ

物もはあまの物なるもの

ニナハ可橋と～

物ヤレヤ 物ツツ 物ツツ 物ツツ

なり浦の舟航の影を月さかぬ曲水の
石まゆい～まゆい～まゆい～まゆい
あまハシ 物ヤレヤ 物ツツ 物ツツ
こまはし～まゆい～まゆい～まゆい
のまゆい～まゆい～まゆい～まゆい

妖女コトノハナよーくハ読とてぬぬ

石磨屋つとみおーきあぬのほらうみ

うづね様ウヅネよーくのむねこ

白道ヒクミチにまきまき馬の上

いづのくせぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

くせぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

陽をぬ糖ニハのひびきぬぬぬぬぬぬぬ

白きシロのねのちーんちーん

あまりのむらむらむらむらコクキチ

白玉オパールの穂ホのちーんちーんちーん

風巾フウキンのえのえのえのえトビカラス

夕スズ風カゼ〜風カゼの胸ムネのちーんちーんちーん

言葉のこころなる

赤い備え

之極上之夏時之月也

畫江之舟
香波稿

浮地之喜戸城下之秋文

秋文

香波

里中ノ話ノ押ノ杜鰐

岸ノ酒吹テ蚊ノ尾掃落

蓮入る者こそ何れも家来の
大い白き

ニホ

巾の巻いし口よこまに
腰布

蝶のみれ敷や夕夕れ
まのま

勝^{ハラタ}ゆりも
あまのま

牡丹はゆり
ゆりのゆ

桔進め
腰やま

始大山妙感寺ノ任職也其弟の筆也

靈江外香水之源頂山情妙寺

六世遠光院日陽和尙

芭蕉の門人なりと傳説とす

享保十四歲圓十月四日卒又十葬

情妙寺辭世の句

小寺玉日也



